

Katherine Mansfield と Virginia Woolf 再考

手塚 裕子

Katherine Mansfield and Virginia Woolf Revisited

Yuko TEZUKA

Abstract

Both Katherine Mansfield and Virginia Woolf played prominent roles in the development of British women's modernism. Although Mansfield and Woolf were attached to each other and they had much affinity, their friendship was uneasy, it was "almost entirely founded on quicksand." Sometimes they had quarrels, became jealous, and hated each other. But in spite of all, they had something in common which could never be found in anyone else. In this study I will make an attempt to reconsider their friendship on the personal and professional level. First, I will explain their affinity and difference from a biographical point of view. Second, I will discuss how hostility was transformed into adoration. Third, I will discuss how they collaborated in making women's modernism. Finally, I would like to demonstrate how prolific and vital their friendship was in the male-dominated literary society of the 1920's.

Key words: Katherine Mansfield, Virginia Woolf, Feminism, British Modernism

Introduction

Katherine Mansfield と Virginia Woolf の友情と文学は、イギリス・モダニズムを研究するフェミニスト批評家にとって、現在、最も興味深いテーマの一つである。モダニズムが出現した1910年代から1920年代のイギリスは、19世紀ヴィクトリア朝の堅固な政治、道徳、価値のシステムが崩壊し始め、激しい変革の時代を迎えていた。なかでも女性たちは、自由と自立を求め、それまでの古い慣習を破り、新しい生き方を模索し、フェミニズムが台頭した。

従来モダニズムは、T. S. Eliot や James Joyce という男性作家を中心に考えられてきたが、モ

ダニズムの運動にフェミニズムのエネルギーを付加する時、女性モダニストの方が、男性作家よりはるかに重層的で深い意味をもつことが次第に明らかになってきた。Sydney Kaplan は *Katherine Mansfield and the Origins of Modernist Fiction* の中で、「女性たちは、イギリス・モダニズムの周辺ではなく、むしろ中心に位置している」と主張し、「女性側から生まれたモダニズムは、男性のモダニズムより、ずっと豊かで複雑で、20世紀後半の文化的な問題点と、より密接な関係をもち、私たちに覚醒の意識を与えてくれる」と述べている。¹

Katherine Mansfield と Virginia Woolf は、親友であると同時に喧嘩相手であり、同じ文学上の目的を追求する同志であり、激しく競い合うライバルでもあった。二人の間には、Woolf 自身の言葉を借りれば、「情熱的な愛と嫌悪感という両極端を揺れ動き」、²「流砂の上に築かれたような」、³あやうさが常に存在していた。愛と憎しみ、共感と嫉妬が交錯する彼女たちの友情は、それ自体が一つの人間的なドラマとして興味深いだけでなく、この二人の友情から、女性の視点と女性の言葉で女性の経験を描いた小説、つまり、今までの男性作家の作品とは全く異なる新しい小説が生み出されたのであるから、研究対象として十分な価値があると思われる。

Mansfield と Woolf の影響関係は、既に多くの研究論文が出版されており、私もまた1994年と1995年に「日本ヴァージニア・ウルフ協会」で研究発表を試みているが、⁴その後、1996年にハンガリーで、Nora Séllei が *Katherine Mansfield and Virginia Woolf: A Personal and Professional Bond*⁵を、そしてアメリカでは、Patricia Moran が *Word of Mouth: Body Language in Katherine Mansfield and Virginia Woolf*⁶を出版し、さらに1999年には、イギリスでAngela Smith が *Katherine Mansfield & Virginia Woolf: A Public of Two*⁷を刊行した。この三冊は、著者の国籍は異なるが、いずれも精緻な研究書である。

本稿では、この三冊を含む最新の研究の動向をふまえた上で、再度、Mansfield と Woolf について研究してみたいと思う。なお、ウルフ協会では、ヴァージニア・ウルフの嫉妬を中心に論じたので、今回は共感し合う二人の友情を中心に論じることにしよう。

1. Uneasy Sisterhood

Ann L. McLaughlin は、Katherine Mansfield と Virginia Woolf の関係を、“uneasy sisterhood”⁸と名付けたが、実際二人は、さまざまな点で同質でありながら、微妙に異質であり、さながら、似ているようで似ていないのに、似ていないようで似ている姉妹のようである。では、まず二人のバックグラウンドを中心に、彼女たちの同質性と差違を究明してみよう。⁹

Katherine Mansfield は、1888年、当時のイギリス植民地であったニュージーランドの首都、ウェリントンに生まれ、姉二人、第一人、妹一人にはさまれた第三子である。父親の Sir Harold Beauchamp は、裕福なビジネスマンで、ニュージーランド銀行の“director”から“Chairman”となり、1923年、経済的貢献が認められ、ナイトに叙せられる。裕福な父は、Day's Bay や Muritai に別荘も持っていたので、Beauchamp 家の子供たちは、夏の休日を海辺の別荘で過ごしていた。この時の思い出が、後に“*At the Bay*”となる。また、弟 Leslie Herron が21歳で戦死したことを悼み、挽歌として“*The Aloe*”を残した。

Virginia Woolf は、1882年、ロンドン的高级住宅街ケンジントンに生まれる。姉一人兄一人、第一人にはさまれた第三子であるが、他に異父兄姉三人、異母姉が一人いる。父親の Sir Leslie Stephen は、ケンブリッジ出身の著名な学者で、*Dictionary of National Biography* (全63巻)を編纂し、1902年、学術的貢献が認められて、やはりナイトに叙せられる。経済的にも余裕のある父は、St. Ives に別荘、Taland House を借り、Stephen 家の子供たちもやはり、海辺の別荘で夏の休日を過ごし、この時の思い出が後に、*To the Lighthouse*となる。また同様に、兄 Thoby の26歳での病死を悲しみ、挽歌として、*Jacob's Room*を残している。

Katherine と Virginia は、地球の反対側で生を受けたが、二人とも“Sir”の称号を得るほど有力な男性を父に持ち、裕福な上層中流階級の子女として、家族構成も子供時代の体験も非常によく似ている。次に二人の受けた教育を比較してみよう。

Mansfield は15歳の時から3年間、姉と共にロンドンのクイーンズ・カレッジに留学する。クイーンズは大変進歩的な女学校であり、その教育方針は「個性を啓発し、生徒の自由で知的な努力を重んずる」というものだった。そこで Mansfield は、ドイツ語、フランス語、英文学、音楽などを自由に学んだ。一方、Woolf は正規の学校には行かなかったが、父親のりっぱな書斎から自由に本を取って読むことを許され、幅広い読書を楽しんだ。また、父の友人である Thomas Carlyle と父との会話、兄 Thoby とケンブリッジ大の学友たちとの議論などを聞きながら、きわめてアカデミックな雰囲気の中で、学問や芸術を自然に吸収しながら成長した。つまり二人は、教育を受けた場所は違うが、当時の女性としては例外的なほど高い教育を授けられていたと考えられる。

そして成人してからの二人は、共に、編集者を夫とし、子供を持たず、Woolf は精神病、Mansfield は結核を病み、病気と闘いながら小説を書き続けた。このように二人の間には非常に多くの共通点が認められる。しかしながら、時として二人が、敵意に近い反感や嫌悪感を感じていたのも、また事実であった。

Mansfield は Woolf の上品ぶった淑女気取りを不愉快に思い、「“intellectual snobbery”が臭

い]¹⁰と言い、WoolfはMansfieldの派手な服装、濃い化粧、安い香水に苛立ち、「売春を始めたじゃこう猫のように臭い」¹¹と言った。二人とも「臭い」「smelly」「stink」という感覚的な言葉で相手を攻撃していることから、これは、理性ではなく直感的、生理的な嫌悪であることは明らかである。では、なぜ同じようなバックグラウンドを持つ二人が、これほどまでに互いに嫌悪と反感を抱いたのだろうか。その理由について考えてみよう。

Mansfieldの伝記作家Antony Alpersは、「“social barrier”は決して取り除くことができなかった」¹²と述べて、植民地ニュージーランドのビジネスマンの家庭に育ったMansfieldと、イギリス本国の首都ロンドンで、学者の家庭に育ったWoolfの間には階級の差があったと主張した。Woolfが属していたブルームズベリー・グループは、Maynard Keynes, Lytton Strachey, E. M. Forsterなど、ケンブリッジ大学卒で上層中流階級出身の知的エリート集団だったが、一方、Mansfieldが寄稿していた雑誌*The New Age*の編集長A. R. Orageや、夫のJohn Middleton Murryと共に編集した雑誌*The Rhythm*の人々は、オックスフォード大学を出たMurry以外には、ほとんど大卒者はなく、どちらかというところ“underworld”つまり貧乏な三文文士の集まりだった。

しかしNora Sélleiは、Mansfieldもまた裕福な上層中流家庭の出身であり、クイーンズ・カレッジで高等教育を受けているので、Woolfと比べて決して“socially inferior”ではなく、両者の間に階級差はないと主張した。ただ、Mansfieldの方が、もっと自由で偶像破壊的であり、Woolfの方が、もっとヴィクトリア朝の価値観に縛られ、「家庭の天使」に支配され、そのような二人の気質の違いが嫌悪感の主な原因ではないかと推測した。¹³

たしかにMansfieldの父は、大金持ちのウェリントンの有力者であり、ナイトの称号を持ち、バッキンガム宮殿の茶会にも招待され、また、イギリス在住のBeachamp家の遠縁の親戚の中には、爵位をもつ貴族もいたので、Mansfieldを“working class”出身と見なすことはできない。やはりWoolfと同じ“upper-middle class”と考えてさしつかえない。しかしながらMansfieldは、貴族的な雰囲気のあるブルームズベリー・グループの人々の中で、絶えず疎外感に悩まされていたのも事実である。そうすると階級差があったと主張するAlpersも、無かったと主張するSélleiの議論も説得力に乏しい。つまり、階級という概念自体が、この二人の場合、うまく機能していないのではないだろうか。問題は階級差の有無ではなく、階級に対する帰属意識の違いではないかと私は考える。

Woolfは階級に対する強い帰属意識をもっていた。Woolfに限らず、この当時のイギリス生まれの作家たちは、自分の階級に対する帰属意識が強い。たとえば、D. H. Lawrenceは、ノッティンガムの炭坑夫の息子という明確な階級意識をもっていた。しかしWoolfやLawrenceと

対照的に、Mansfield のクラス・アイデンティティーは非常に曖昧である。

彼女は令嬢のように育ちながら、ボヘミアンの生活を好み、父の不興を買って仕送りの年金が少なくなったため、ロンドンでは貧乏暮らしを余儀なくされたが、それでも食べ物より、花や洋服に関心をもちつづけた。Mansfield は、Lady Ottoline Morrell のような貴族の友人だけでなく、貧乏な三文文士にも友人をもち、Florian Sobieniowski のような怪しいポーランド人のボヘミアンとも親しく、さまざまな階級の人々と交流した。そのうえ Mansfield は、ナショナル・アイデンティティーもまた曖昧である。Woolf はイギリス人以外の何者でもなかったが、Mansfield は、ニュージーランドに生まれ、イギリスに渡りイギリス人と結婚し、晩年はヨーロッパ大陸で療養しながらニュージーランドを舞台にした小説を書き、作品はイギリスで出版され、フランスで死に、そこで埋葬された。

Mansfield の階級帰属意識の曖昧さは、今日、階級社会が崩壊し、国境を越えた交流が活発化した 20 世紀末の世界に生きる私たち読者にとって、むしろ馴染みやすいものだが、Woolf を含む当時の階級意識の強いイギリス人にとって、Mansfield のような人間の存在は、全く未知の、不可思議で異質なものと見なされたのではないだろうか。

Angela Smith もまた Woolf と Mansfield の「異質性」に注目している。Smith は Julia Kristeva の『外国人』を引用しながら、次のように説明している。「Mansfield の独立と性的自由は、彼女に肉体を書かせることを可能にしたが、Woolf にはそれはできなかった。一方、Woolf の家庭的な安定と知的な友人たちのサークルは、彼女に、小説に関して様々な実験や冒険を試みることを可能にしたが、書くことによって生活を支えていた Mansfield にはそれは不可能だった。二人とも相手の『外国人』的要素の中に、自己の内部にあって、あこがれと同時に軽蔑をもよおさせる何かを見つけていた」¹⁴

Kristeva によれば、私たちが外人を忌み嫌ったり、反対に崇拜したりするのは、実は私たち自身が自己の内部に「異質性」を抱えていて、ふだんは無意識下に抑圧しているのだが、それが外人との遭遇によって、意識の中に上ってくる。すると最初は拒否感が働いて、「不愉快」や「不気味」と感じるが、次第に、抑圧からの解放感を感じるようになり、憧憬へと変化していくと分析している。この Kristeva の分析は、愛と憎しみの両極端を揺れ動く Mansfield と Woolf の関係を説明するために、非常に有効である。では次の章で、Woolf が Mansfield との出会いによって、如何にして自己の「異質性」と和解し、嫌悪からあこがれへと変わっていったのか、Kristeva を使いながら、Angela Smith とはまた違った視点から詳細に見てみることにしよう。

2. Strangers

1916年末、Virginia WoolfはKatherine Mansfieldと初めて出会うが、この時の第一印象はかなり不愉快なものだった。WoolfはMansfieldの香水の匂いと不道德な内容の話から「じゃこう猫」を連想し、「実を言うと、私は最初彼女を見たとき、彼女の平凡さにショックを受けた。表情は硬く、安っぽかった」と、後に日記に記している。¹⁵

Woolfは幼い時に、異父兄から性的いたづらをされたことがトラウマとなって、性に対して嫌悪感を持つようになり、また結婚後も、精神病の再発を防ぐために性生活は控えられていた。一方、Mansfieldは、健康で活発で早熟な文学少女であったから、思春期になるとごく自然に、性に強い関心を示すようになった。ニュージーランドにいた13歳の時、“free love”（結婚外の恋愛は当時はタブーだった）について淑やかな女性の先生に質問して先生を驚かせたり、また、美しい同級生の少女Maataと“some experience”を持ち、そしてロンドンのクィーンズ・カレッジに留学してからは、Oscar Wildeを耽読し、ますます性的に危険な傾向を強め、レイプや妊娠を主題とする過激な物語を作っては、おとなしい同級生たちを驚かせて喜んでいった。

それは思春期の少年が、ことさら性的な話題を口にして大人を驚かせて喜ぶのと同様である。しかし、男の子には成長の一段階として大目に見られることでも、エドワード朝の優雅な女の子たちには、そのような行為は固く禁じられていた。Mansfieldは少女の頃から、窮屈で不自然な女子教育に反抗する、生まれつきのフェミニストであった。Mansfieldの伝記作家として現在最も信頼されているClaire Tomalinは、女学校の中で男の子のように振る舞うMansfieldの男性的性格を次のように分析している。

For her, as for many precocious girls, an early interest in sexual adventure may have been partly a refusal of the feminine role required by family and other authorities, a defiance of their decrees. To be wilful, to be assertive, to be overtly interested in sex, was the prerogative of young men; but why should it be? Why not refuse the reticences and timidities expected of girls? If this boldness drew disapproval, it also gave her an exceptional appeal, because she was adopting the role of a young male in a predominantly female establishment.¹⁶

クィーンズの少女たちは、Mansfieldを嫌悪する多数派と崇拜する少数派の両極端に分かれていたが、Woolfの心の中では、最初は嫌悪感が優勢だったが、次第に嫌悪は憧憬へと変化し

ていく。1916年末の初対面は気まずかったが、その後も二人は度々話し合う機会を持ち、年が明けて1917年2月になると、Mansfieldへの嫌悪感は和らぎ始め、Woolfは姉のVanessaに宛て次のような手紙を書いている。「私はKatherine Mansfieldと少し和解しました」。¹⁷そして4ヶ月後の1917年6月27日になると、WoolfはMansfieldの不道徳で大胆な冒険談にすっかり魅了され、同じく姉に宛て次のような手紙を書く。「私は昨夜、K. Mansfieldと奇妙な話をしました。彼女は17歳からずっとあらゆる種類の暗黒の経験をしてきたようですが、それは面白いことです。彼女は他の誰よりも書くことについて、ずっと良いアイデアを持っていると思います」。¹⁸

この夜、Mansfieldは思春期からの数々の冒険——さまざまな男たちとの恋愛、失恋、喪服での結婚式、恋人との逃避行、不本意な妊娠、流産など——について、多少の誇張を交えながら、面白おかしくWoolfに語って聞かせたようである。Woolfが期待通りにショックを受けた様子を見て、Mansfieldはすっかり気をよくしてWoolfに好感を抱き、7月3日、二人の共通の友人でパトロンでもあるLady Ottoline Morrellに宛て次のような手紙を書く。「私は先週、彼女（Woolf）と食事しましたが、彼女は魅力的でした。私はとても彼女を好きになりました。その時初めて、私は彼女の心の揺れ動き、煌めくような性質を感じました。彼女は本当に初めて『無垢』が傷つけられたドストエフスキーの女性たちの一人のようでした」。¹⁹

Virginia Woolfが嫌悪から愛へとMansfieldに対する態度を転換したのは、Woolfが自分自身の中に、Mansfieldと共通する要素、つまりKristevaの言う「我々の根本をなす異質性、徹底的に外人たる我」を発見したからではないだろうか。Kristevaは著書『外国人』の中で、我々の内なる外人について次のように説明している。²⁰「フロイトの無意識の概念によって、心理的に内面化した異常は病的なものとはみなされなくなり、統一体と思われていた人間に、他者が導入される。生物学的な、また同時に象徴的なもので、同一者の内部として内在する他者」(p. 221), 「不安を呼ぶものとしての異者、我々自身のうちに存在するもの。自分こそ自分に対して外人なのだ——分割された自分」(p. 221), 「人は他者によって自分の他性——異質性と和解し、これを楽しみこれを生きていけるようになる。精神分析は、他者及び自己の異質性への旅となろう。相容れぬものを尊重するという倫理をめざす旅、自分が自分にとって外人であると知らずに、どうして外人を受け入れられようか?」。(p. 222)

エドワード朝の“lady”の規範を軽々と飛び越え、自由に奔放に生きるMansfieldに、上品でとりすましたWoolfは、最初、苛立ちを覚えたが、実はWoolf自身も、心の奥深くでは密かに“lady”の規範に反感をもっていたのである。その証拠として、“lady”の仮面の下に隠されていたWoolfの「反抗児」としての側面を見てみよう。

1904年2月、父親の Leslie Stephen が亡くなると、Stephen 家の子供たちはケンジントンの家を処分して、あまり上品ではないが自由でモダンな街、ブルームズベリーに転居する。保護者もなく、未婚の兄弟姉妹だけでブルームズベリーに住むことに、親戚の大人たちは眉をひそめたが、Woolf は初めて味わう自由と開放感に酔い、「なにもかもが新しくなろうとしていました。なにもかもが変わろうとしていました」と喜んだ。²¹

1908年頃、Lytton Strachey が Vanessa の白いドレスについた汚れを指して、「精液？」と言ったことから、ブルームズベリーの第2章が始まる。この一言によって、「無口と控えめの障壁が取り除かれ」、以後、Woolf たちは性についてフランクに語り合うようになり、「光の洪水が性の分野にどっと注ぎ込み」、重苦しいタブーが崩壊する。「事実、ブルームズベリーの将来は、性の主題に多くの変奏が可能であると証明することだった」²²と得意そうに語る Woolf は、この時、既に26歳になっていたが、わざと性的な話題を口にして周囲を驚かせて喜んでいた思春期の Mansfield とよく似ている。

1910年2月、「生まれつきの探検家、革命家、改革者」²³としての Woolf の側面を最もよく物語るエピソード、“Dreadnought Hoax”²⁴が起る。“Dreadnought Hoax”とは、Virginia と弟の Adrian, Duncan Grant 他三名の若者が、顔を黒く塗ってアビシニア皇帝一行に変装し、外務省のニセ電報で海軍を信用させ、戦艦 Dreadnought を表敬訪問し、艦上で手厚いもてなしを受け、まんまとイギリス海軍を騙した、半ば犯罪のようないたずら事件である。この事件は新聞に大きく報道され、なかでも唯一の女性であった Virginia に人々の関心が集まった。公式には大きな処罰を免れたものの、Stephen 家の親戚は憤慨し、従姉 Drothea Stephen は、Virginia のしたことは愚かで下品であると叱責した。²⁵

Mansfield の「不道徳」を非難した Woolf だったが、実は彼女自身も Stephen 一族の大人たちから、「下品」な変わり者と見られていたのである。この事件について当時の Woolf は多くを語らなかったが、30年後の1940年夏、ロドメルの Women's Institute で女性の聴衆の前でこの事件の全容を語り、9月にはメモワール・クラブでも同じ話をして、どちらも拍手喝采を受けている。Woolf の新しい伝記を書いた Hermione Lee は、「Woolf は、この話を語ることを好んでいた」と述べ、語ることによって“Dreadnought Hoax”は、「一種のフェミニスト伝説になった」と評価している。²⁶もちろん Mansfield の冒険に比べれば子供だましのようなものだが、それでも Woolf の中に Mansfield 的要素があったことを証明するには十分な事実である。

1923年、Mansfield が死んだ直後、Woolf は Vita Sackville-West と出会い、やがて恋に落ちるが、Vita もまた Mansfield と同様、自由奔放でエキゾチックな魅力で Woolf の心を魅了した女性である。Woolf の甥で伝記作家の Quentin Bell は、Katherine と Vita の共通点を指摘し、

「Vita に対する感情のすべては、既に Katherine の時に感じたものだったが、Woolf はその気持ちを Katherine に伝えたことはなかった。また、Vita に書いたような手紙も彼女には書かなかった」²⁷と述べている。Woolf は Vita との恋愛中に、しばしば Katherine の夢を見、Katherine との関係を Vita に話し、1931 年 8 月 8 日の手紙では、自分が如何に Katherine の “sharpness” と “reality” を崇拝していたか説明している。

As for Katherine, I think you've got it very nearly right. We did not ever coalesce; but I was fascinated, and she respectful, only I thought her cheap, and she thought me priggish; and yet we were both compelled to meet simply in order to talk about writing. This we did by the hour.... But the fact remains—I mean, that she had a quality I adored, and needed; I think her sharpness and reality—her having knocked about with prostitutes and so on, whereas I had always been respectable—was the thing I wanted then. I dream of her often—now that's an odd reflection—how one's relation with a person seems to be continued after death in dreams, and with some odd reality, too.²⁸

しかしながら Vita と Katherine の大きな違いは、Vita の文学的才能は平凡なものだったが、Mansfield は Woolf が「嫉妬した唯一の女性作家」だったことである。Woolf と Mansfield の関係の複雑さと面白さは、人間的な魅力を感じあう友人というだけでなく、二人が同じ才能を持つプロの女性作家であったという点にある。次の章では、プロの作家としての二人の関係について論じよう。

3. Some Extraordinary Coincidence

1917 年夏は、Woolf と Mansfield の最初の蜜月時代である。8 月 17 日、Woolf はサセックスにある別荘、アッシュム・ハウスに Mansfield を招待し、二人はそこでお互いの新しい作品について語り合い、充実した 5 日間を過ごす。Woolf は 7 月に出版されたばかりの “The Mark on the Wall” と、後に “Kew Gardens” となる “Flower Bed” の原稿を見せ、Mansfield はホガス・プレスで出版することに決まった *Prelude* の原稿を持っていた。

この時二人の間で話題になった 3 つの作品は、どれも全く新しいタイプのモダニズムの小説だった。“The Mark on the Wall” は、「意識の流れ」の手法を用いて内面心理を追究し、プロットを破壊した実験的小説である。“Kew Gardens” は、夏の午後の植物園のスケッチだが、

人物と草花の輪郭がぼやけて溶け合い、光と色彩が戯れる、まるで印象派の絵のような作品である。

“Kew Gardens”は、モダニストとしての Woolf の代表的な作品であるが、この原稿の執筆には、実は、Mansfield が深く関わっている。8月17日に Mansfield はアッシュム・ハウスを訪れるが、その前に Woolf に手紙を送り、その中で Ottoline Morrell のガーシントン・マナーの庭園スケッチを書いていた。その手紙は現存しないので、具体的な内容はわからないが、8月15日、Woolf は Morrell に宛て、「Katherine Mansfield があなたの庭を描いてみせました。太陽の光の中で枯れた薔薇の花びら、池、月光の中を散歩する人々の長い会話……」と書いていることから、Mansfield も 1917 年 8 月頃、草花と人間と光が溶け合うような庭園スケッチを試みていたことは確かである。Mansfield の伝記作家、Antony Alpers は、Woolf の “Kew Gardens” は “Katherine’s direct prompting” によって書かれたのではないなら、この異常なまでの偶然の一致 (some extraordinary coincidence) は、どうやって説明するのだろうか」と疑問を投げかけ、Woolf が Mansfield の手紙を手本として “Kew Gardens” を書いたのではないかと推察している。²⁹ 一方、Woolf の伝記作家、Hermione Lee は、「Virginia の原稿が Katherine のスケッチに影響を与えたのか、Katherine のスケッチが “Kew Gardens” に影響を与えたのか、いずれにしても、このオーバーラップは、二人が如何に親しかったかを示している」と述べ、どちらの文章が先にあったかの議論を回避し、両者の間に強い影響関係があったことだけを強調している。³⁰

私の考えでは、8月15日付の Woolf の手紙から推量して、やはり Mansfield のスケッチが先にあって、そのアイデアに刺激されて、Woolf が “Kew Gardens” を完成させたのではないかと思う。ただそれが、Alpers の言うような “direct prompting” だったかどうかは疑問である。おそらく何らかの偶然で、同じ時期に Woolf も夏の庭園スケッチの構想を練っていて、そこに Mansfield の手紙が届き、自分と同じ主題を彼女も追っていることを知って励まされ、同時にライバル意識も感じて、彼女と競うように Woolf は自分の文章で一気に原稿を書き上げ、それを別荘に遊びに来た Mansfield にさっそく見せたのではないだろうか。つまり “some extraordinary coincidence” が実際に存在したのではないかと思う。一方、Mansfield は Woolf の原稿を読んだ後、自分のスケッチとの類似に気がついたが、Woolf に模倣されたと非難するどころか、自分たち二人が偶然にも「同じ仕事を持ち」、「同じ目的を追いかけている」ことを発見して、非常に喜んでいる。8月23日、アッシュムの滞在を終えてロンドンの自宅に帰った Mansfield が Woolf に宛てた礼状には次のように書かれている。

It was good to have time to talk to you. We have got the same job, Virginia & it is really very curious & thrilling that we should both, quite apart from each other, be after so very nearly the same thing. We are you know; there's no denying it.³¹(underline mine)

こうして1917年にMansfieldは、自分たちの感性と文学の同質性を、強くWoolfに印象づける。その後、WoolfもMansfieldとの一体感を徐々に強め、1920年になるとWoolfの方がMansfieldに夢中になる。WoolfはMansfieldの言葉の中に、自分自身の感覚が初めて表現されたように感じた。1920年5月31日、Woolfは日記に次のように書いている。「私たちは孤独について話した。そして、彼女(Mansfield)の言葉が私自身の感情を表現していることを知った。その感情は今まで一度も表現されたことがないものだった」、「私たちの間には一つの共通理解がある。——つまり、奇妙なほど似ているのだ。(a queer sense of being 'like')」。³²また、同年8月25日の日記には、「私はK. M. と昼食をとり、2時間のすばらしい話をした。書くことを私と同じくらい愛している女性は貴重な存在だ。私が話した直後に、彼女の心から私に向かってこだまが響いてくるようなとても奇妙な感じがする。(a queerest sense of echo)」³³と書いている。

1920年は、二人が最も親しかった時期であるが、この頃のWoolfの日記から推測すると、まるでWoolfはMansfieldに恋をしていたかのようである。Hermione Leeも、この時のWoolfの日記には、「ほとんどエロティックなほどの親密さ、まるで数年後に書かれた*Orlando*の中の両性具有の恋人たちが愛を語り合っているような親密さがある」³⁴と述べている。

WoolfとMansfieldの心を、これほどまで強く結びつけたのは、「書くことへの情熱」(a passion for writing)を共有する、作家としてのプロ意識に他ならない。MansfieldはWoolfに宛て、「私はなぜかあなたが作家であり、書くために生きていることがうれしくてたまりません——私も同じだからです。あなたは私の世界の中でとても大切な女性です」³⁵と書き、一方、Woolfは友人に宛てた手紙の中で、Mansfieldについて次のように語っている。「しかし彼女は、あらゆる意味で面白い人です。書くことへの情熱をもっています。だから私たちはシェイクスピアを称えながら几帳面に会いつづけるのです」。³⁶

そして二人の「書くことへの情熱」は、Rose Macaulay, Naomi Royde Smithなど、その他の同時代の女性作家たちの誰とも共有できないものだった。二人はお互いを、唯一のかけがえない存在として認め合うようになる。結核の病状が重くなり、南仏のマントンに療養していたMansfieldが、Woolfに宛てた最後の手紙には次のように書かれていた。「私にとってあなたの訪問がどれほどのものであったか、そして私がどれほど懐かしく思っているかあなたはご存

知でしょうか。あなたは、私が仕事について話したいと思う唯一の女性です。他には誰もいません」。³⁷ 1923年1月16日、Mansfieldのフランスでの死の知らせにショックを受けた Woolf は日記に次のように記している。「今でも書くことについて、キャサリンと話したいと思うことがある」、「おそらく私たちは共通の何かを持っていて、それは決して他の誰かの中には見出せないものなのだ」。³⁸

男性中心の20世紀初頭のイギリス文学界にあって、少数派として孤立していた女性作家にとって、自分と同じ情熱と感覚を持つもう一人の女性作家の存在がどれほど心強いものであったか、想像するに難しくない。次の章では、男性作家の支配的状況の下で、二人の女性作家が、如何に互いを支え合い、励まし合いながら女性の視点によるモダニズムを発展させていったのか、その過程を検証してみよう。

4. Two Women Writers in the Male-Dominance

Mansfield と Woolf の夫は、二人とも編集者であり、批評家である。彼女たちの作品は、夫たちの協力と強い影響力の下に出版された。そのうえ、彼女たちは健康がすぐれなかったので、生活面では夫に頼ることが多かった。つまり彼女たちの芸術と生活は、夫の精神的、物質的な支えの上に成立していたことは否定できない。もちろん芸術家の妻と批評家の夫との間に、全く軋轢がなかったとは言えない。Woolf は夫、Leonard Woolf の批評を常に気にしていたし、Mansfield は頼り甲斐のない夫、John Middleton Murry にしばしば失望し、この夫妻はいろいろな理由で別居したり、破局の危機を迎えることもあった。しかし、その Mansfield にしても、代表作、“At the Bay” “The Garden Party” などは、夫と二人で安定した生活をしている時に執筆したものである。Mansfield は Woolf に次のような手紙を書いている。「夫と家とたくさんの本、そして書くことへの情熱、それらすべてを所有するのは、とてもすてきですね。あなたと Leonard がいっしょにいると思うと楽しいです。私もそうですから」。³⁹

少々強引な言い方をすれば、Mansfield も Woolf もフェミニストであったが、男に支えられたい、男の称賛を求めたいという、一種の「弱点」をもっていたと考えられる。だが、現代と違って、女性が小説を書き、自己を主張することに対して、まだまだ偏見や風当たりが強かった時代背景を考慮すれば、味方になってくれる夫にたよったことで、彼女たちを「弱い」と責めることは、軽率であるかもしれない。

Leonard Woolf と John Middleton Murry は、確かに妻たちの文学の良き理解者であったことは間違いないが、果たして彼らが妻のフェミニズムまで理解していたかどうかは疑問である。

彼らは正面からフェミニズムに反対はしなかったが、だからと言って、積極的に賛成した形跡もない。そればかりでなく Woolf は Murry の何気ない言葉によって、深く傷つけられたこともあった。

1919年4月16日、Woolf と Mansfield と Murry が、3人でお茶を飲んでいたら、Murry が T. S. Eliot は男性の正統派 (the orthodox masculine thing about Eliot) であると発言したことから、Woolf はショックを受け、「私は男とは何と馬鹿みたいな視点で自分たちを偉いと思っていることかと驚いた。私はキャサリンと話す方がずっと話しやすい。彼女は私が期待するとおりに反抗してくれる。(中略)でも私は Murry を尊敬している。私は彼からよく思われたい」。⁴⁰ この記述から、男の傲慢さに怒りながらも、男の評価を気にしている Woolf の弱点も明らかである。そして Murry が T. S. Eliot たち男性モダニストを正統派と考え、女性モダニストを一段低く見ていたことも明らかである。Murry が特に女性を差別していたというより、おそらく当時はこのような考え方が一般的だったのだろう。しかしながら、一番身近にいる夫からも、何気なく差別されてしまう日常の中では、女性が自信をもって文学と取り組むためには、同志である女性作家の存在は非常に大きい。時には、Mansfield と Woolf は、それぞれの夫よりも、お互いに共感し合っていたのではないだろうか。

では夫以外の男性作家の場合はどうだろうか。Katherine Mansfield と D. H. Lawrence は、夫婦ぐるみで交際し、公私にわたる親しい友人である。Lawrence の *Women in Love* の Gudrun が Mansfield をモデルにしていることは、よく知られている。1922年8月、死期の近い Mansfield は、遺書の中に Lawrence の名前を加え、彼に蔵書を贈った。一方、外国旅行中の Lawrence はウェリントンから、「Ricordi！」と一言書いた絵葉書を送り、死の床の Mansfield を大変喜ばせた。Claire Tomalin は、「二人の間に本当の親密さがあったことは疑いもない」と解釈している。⁴¹

しかしながら Mansfield はそれほどの親しさにもかかわらず、「Lawrence のプライドが友情を難しくした」⁴²とも回想している。また Lawrence は Mansfield の死をひどく悲しんだが、「かわいそうな Katherine、彼女はデリケートで感じやすい。でも偉大じゃない！どうして偉大だと言えるのか」⁴³と言った。たしかに Mansfield と Lawrence は親しい友人だったが、本当に共感し合うには、彼の男のプライドが障害となり、彼はあくまでも Mansfield を女流作家という二流の作家と見ていたようである。

さて Virginia Woolf の場合、彼女にとって最も親しい男性作家は E. M. Forster である。Forster はブルームズベリー・グループのメンバーとして古くからの良き友人であり、「Woolf が最も尊敬した同時代の作家である」。⁴⁴ “1917 Club” で一人のユダヤ人の男が、「Dorothy

Richardson, Katherine Mansfield, Virginia Woolfは役に立たない」と言って女性作家を侮辱したとき、すかさずForsterは「*Prelude*と*The Voyage Out*は最上の現代小説だ」と述べて、MansfieldとWoolfを弁護してくれたことがあった。⁴⁶しかしながらForsterはWoolfの実験的小説には無関心だったし、ましてフェミニズムについては、彼女の文学の欠点（spot）であると考えていた。⁴⁶Quentin BellはWoolfとForsterの関係を次のようにまとめている。「彼はVirginiaのフェミニズムに苛立ち、彼女に対して、すこし辛辣すぎるほど批判的になることもあった」、「それにもかかわらずふたりの間には愛情があった」。⁴⁷この二人の場合も、MansfieldとLawrenceの場合と同様、お互いに尊敬し愛し合っていたにもかかわらず、両者の間には性の差という越えがたい溝があったと言えよう。

そして、D. H. LawrenceやE. M. Forsterより若い世代の男性モダニスト作家、James JoyceとT. S. Eliotに対して、MansfieldとWoolfは共同戦線を展開する。JoyceはWoolfと同じ年に生まれ、1914年に*Dubliners*、1916年に*A Portrait of a Young Man as an Artist*を刊行し、Woolfと同時期に新しい手法の小説に関心を寄せていた。その点では、E. M. Forsterよりずっと彼女に似たタイプの作家だったが、WoolfはJoyceの作品がどうしても好きになれなかった。1918年4月9日、Harriet WeaverがJoyceの*Ulysses*の原稿を持ち込み、ホガース・プレスでの出版を依頼したが、Woolf夫妻は断った。当時ホガース・プレスは、Mansfieldの*Prelude*の印刷に追われていて余裕がなかったのだが、本当の理由は、VirginiaがJoyceの作品は実験としては面白いが、言葉が下品で内容が退屈だと思ったからだった。彼女はRoger Fry宛の手紙に次のように書いている。

I've been reading Joyce's novel. Its interesting as an experiment; he leaves out the narrative, and tries to give the thoughts, but I don't know that he's got anything very interesting to say, and after all the p-ing of a dog isn't very different from the p-ing of a man. Three hundred pages of it might be boring. Anyhow its too long for us to attempt, though I think someone ought to bring out a piece of it.⁴⁸

1918年11月15日、T. S. EliotはWoolf夫妻の家を訪問する。T. S. EliotはMansfieldと同じ年にアメリカで生まれ、1914年からイギリスに住み、1917年に*Love Songs of Alfred Prufrock*を出版し、新しいタイプの詩人として一躍注目を浴びていた。WoolfはEliotを一目見て、「外見は洗練された教養あるアメリカ人」だが、内面は「非常に知的で不寛容で自分自身の考え方や詩的な信念を強固に持っている」⁴⁹と判断し、彼がJoyceをととても尊敬していることに失望し

たが、ホガース・プレスは彼の詩を出版することに決め、1919年5月、Woolfの“Kew Gardens”と共に、Eliotの*Poems*が刊行される。

Hermioni Leeは次のようにWoolfとT. S. Eliotの関係を分析している。「二人は文学について意見が合わなかった。彼がPound, Joyce, Wyndam Lewisを尊敬していることが、最初の論争の火種となった」、「VirginiaはPoundをほとんど読んだことがなかったが嫌いだった。PoundはEliotの最大の支持者だった」、「EliotはLewisを支持したが、Virginiaは彼を嫌悪していた」、「その上、Eliotは彼女のフェミニズムに冷笑的だった」。⁵⁰

つまりWoolfはJoyceとEliotの才能や彼らの新しさを高く評価していたが、違和感を感じずにいられなかった。特に、女性を見下ろしているような男の傲慢さとアンチ・フェミニズムが不快だった。それなのに、彼ら男性が正統派として批評家たちから高く評価されているのを見ると、Woolfは自信をなくして不安になる。そのような時、女性として同じ痛みを分け合うKatherine Mansfieldの存在はどれほどWoolfを勇気づけたことだろう。Mansfieldは次のような手紙をWoolfに書き、彼女を励ましたのである。

Eliot —Virginia? The poems look delightful but I confess I think them unspeakably dreary. How one could write so absolutely without emotion— perhaps that’s an achievement.... I don’t know —these dark young men— so proud of their plumes and their black and silver cloaks and even so expensive pompes funèbres— I’ve no patience.⁵¹

またMansfieldは、1919年7月19日、Morrell宛の手紙の中で、Joyceの「男の傲慢」を批判し嫌悪感を表明する一方、男たちとは異なる「新しい言葉」によって、「今まで隠されていた国」すなわち「散文という美しい手段」を開拓したいと抱負を述べている。⁵²これは男性正統派の亜流としての女性作家ではなく、男性とは別の言葉、別の感性を持った、女性独自の文学を追求しようとする決意の表れである。

Conclusion

MansfieldとWoolfにとって、D. H. LawrenceやE. M. Forsterのような年上の作家より、T. S. EliotやJames Joyceたち同年代のモダニズム作家の方が難しい相手だった。明らかにモダニズムの男性作家と女性作家の間には、きびしいライバル意識があった。多数派で優勢な男性作家に押しつぶされずに、MansfieldとWoolfが自分たちの文学を展開させることができたの

は、ひとえに二人の友情の賜物ではなかったかと思う。

二人は、誤解から仲違いして疎遠になることもあったが、それでも再会すれば、たちまち打ち解けて何時間でも文学の話に熱中した。二人は世間話や噂話、家庭や子供や洋服のおしゃべりをするのではなく、ただ文学の話だけをするプロフェッショナルだった。女性の社会進出からまだ日が浅く、職業を持つ女性が少なく、男の友情に比べて女の友情がとかくネガティブに見られる時代の中で、Katherine MansfieldとVirginia Woolfの友情は、今日の女性たちにとって、一つのモデルを示すものであると思う。

(1999年10月)

Notes

- 1 Kaplan, Sydney Janet. *Katherine Mansfield and the Origins of Modernist Fiction*, Cornell University Press, 1991, pp. 6–9.
- 2 Woolf, Virginia. *The Question of Things Happening: The Letters of Virginia Woolf*, vol. 2, ed. Nigel Nicolson and Joanne Trautmann, The Hogarth Press, 1976, p. 553.
- 3 Woolf, Virginia. *The Diary of Virginia Woolf (DVW)*, vol.1, ed. Anne Olivier Bell, Penguin, 1977, p. 243.
- 4 1994年10月、第14回日本ヴァージニア・ウルフ協会全国大会（於、桜美林大学）にて、「ヴァージニア・ウルフとキャサリン・マンズフィールド」を口頭研究発表。1995年、ウルフ協会機関誌、『ヴァージニア・ウルフ研究』第12号に、論文「ヴァージニア・ウルフの嫉妬」を発表。
- 5 Séllei, Nora. *Katherine Mansfield and Virginia Woolf: A Personal Bond*, Peter Lang, 1996.
- 6 Moran, Patricia. *Word of Mouth: Body Language in Katherine Mansfield and Virginia Woolf*, University Press of Virginia, 1996.
- 7 Smith, Angela. *Katherine Mansfield & Virginia Woolf: A Public of Two*, Clarendon Press, 1999.
- 8 McLaughlin, Ann L.. “An Uneasy Sisterhood: Virginia Woolf and Katherine Mansfield”, ed. Jane Marcus, *Virginia Woolf: A Feminist Slant*, University of Nebraska Press, 1983, pp. 152–161.
- 9 マンスフィールドとウルフの伝記的記述については、主として次の文献を参考にした。Alpers, Antony. *The Life of Katherine Mansfield*, Jonathan Cape, 1980. Tomalin, Claire. *The Life of Katherine Mansfield*, Viking, 1987. Bell, Quentin. *Virginia Woolf*, The Hogarth Press, 1972. Lee, Hermione. *Virginia Woolf*, Alfred A. Knopf, 1997.
- 10 *The Collected Letters of Katherine Mansfield (CLKM)*, vol.2, ed. Vincent O’Sullivan and Margaret Scott, Clarendon Press, 1993, p.77.
- 11 *DVW*, vol. 2, p. 58.
- 12 Alpers, p. 248.
- 13 Séllei, pp. 51–3.
- 14 Smith, p. 32.
- 15 *DVW*, vol. 2, p. 58.
- 16 Tomalin, p. 24.

- 17 *The Letters of Virginia Woolf*, vol. 2, p. 144.
- 18 *Ibid*, p. 159.
- 19 *CLKM*, vol. 2, pp. 314–5.
- 20 ジュリア・クリステヴァ著, 池田和子訳, 『外国人』, 法政大学出版局, 1990年。
- 21 Woolf, Virginia. “Old Bloomsbury”, *Moments of Being*, Crafton Books, 1978, p. 188.
- 22 “*Ibid*”, p. 201.
- 23 Woolf, Virginia. “A Sketch of the Past”, *Moments of Being*, p. 147.
- 24 この事件は, Woolf の伝記の中で最近, 特に注目されている。詳しくは次の文献を参照のこと。
Stansky, Peter. *On or About December 1910*, Harvard University Press, 1977.
- 25 Lee, p. 282.
- 26 *Ibid*, p. 283.
- 27 Bell, p. 117.
- 28 *The Letters of Virginia Woolf*, vol. 4, p. 366.
- 29 Alpers, p. 251.
- 30 Lee, p. 384.
- 31 *CLKM*, vol. 1, p. 327.
- 32 *DVW*, vol. 2, pp. 44–5.
- 33 *Ibid*, p. 61.
- 34 Lee, p. 391.
- 35 *CLKM*, vol. 2, p. 288.
- 36 *The Letters of Virginia Woolf*, vol. 2, p. 383.
- 37 “Fifteen Letters from K.M. to Virginia Woolf”, *Adam International Review*, nos. 370–375, p. 24.
- 38 *DVW*, vol. 2, pp. 225–7.
- 39 *CLKM*, vol. 2, p. 314.
- 40 *DVW*, vol. 1, p. 265.
- 41 Tomalin, p. 151.
- 42 *The Letters of Katherine Mansfield*, vol. 2, ed. John Middleton Murry, Constable, 1928, p. 175.
- 43 *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 4, ed. James T. Boulton, Cambridge University Press, 1979, p. 520.
- 44 Bell, p. 132–3.
- 45 Woolf, Virginia. *Congenial Spirits: The Selected Letters of Virginia Woolf*, ed. Joanne Trautmann Banks, the Hogarth Press, 1989, p. 128.
- 46 Forster, E.M.. “Virginia Woolf”, ed. Eleanor McNeese, *Virginia Woolf: Critical Assessments*, vol.1, Helm Information, 1994, p. 123. (Copyright: 1942, by Harcourt, Brace and Company).
- 47 Bell, p. 133.
- 48 *The Letters of Virginia Woolf*, vol. 2, p. 234.
- 49 *DVW*, vol. 1, pp. 218–9.
- 50 Lee, p. 433.
- 51 “Fifteen Letters of K.M. to Virginia Woolf”, p. 19.
- 52 *CLKM*, vol. 2, p. 343. In this letter K.M. wrote, “In Joyce there is peculiar *male* arrogance that revolts me more than I can say— it sickens me. I dislike his method equally with his mind & *cannot* see his power of writing.”